「新しい神の支配に生きる（Ⅱ）」

マルコによる福音書１２章２８－３４節

森島　牧人　牧師

先回、十戒の前文は、「神とイスラエルとの愛と信頼」という人間的なものよりもずっと高い「人格的関係」を宣言しているので、その前提に立って「本当に私を愛し信じているなら、当然のこととして偶像を拝んだり、安息日を軽視することはないだろう。また、本当に私の存在を信じているなら、隣人の人権を侵すことはないだろう。」と命じた、否、期待を寄せているのが、モーセの十戒の本質であることを学びました。

今日はその続きですが、主イエスが律法学者の問いに答えて言われた、「イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」（マルコ１２：２９－３０）とのこれには、あの十戒の前文を人々に想起させる意図があるのであり、６１３の掟に縛られている当時のイスラエルの民を十戒という古い契約の根底を成す「神と人間の生き生きとした交わり」に＜立ち返らせたい＞との主イエスの強い思いがありました。神が人々を招いて呼びかけ、人々がその神の愛に応えて行く中で生まれて来る＜人格的共同体＞こそが「神の支配」であり、「神の国」であり、しかもそれは「もう既に来ている」ということを伝えるのが、主御自身の使命であると考えておられたからです。神が私たちを愛し、私たちがそのような愛をもって互いに愛し合う。聖書では、この神の「愛」と、隣人に対する「愛」は共に「アガペー」として記されているのです。

また、創世記１：２７には、「神は御自分にかたどって人を創造された。」とありますが、私たちが神の似姿で創造されたということは、神の言われたことを理解し応答することが出来る＜人格的な存在＞として創造されたということです。しかし、創世記３章にあるように人間は自身の犯した罪の故に、神を愛すること、隣人を愛することが出来なくなってしまいました。そのような状況である人間の＜救済＞には、神との＜和解＞、すなわち「神への応答性の回復」以外には在り得なく、それが聖書のいうところの、罪の結果である＜死からの解放＞ということでした。

イスラエルの歴史である旧約聖書を読むと、エジプトの奴隷であった民がモーセによって紅海を、またヨシュアによってヨルダン川を渡るというように、人間を死に至らしめる「水」を通過して「約束の地」に入ったことが分かります。そして新約の時代、人間は主イエスに与るバプテスマによって、その「水」を通過して「新しい命」・「永遠の命」を得ることが出来ることとなったのです。

さて、その主イエスの答えを聞いていた律法学者は、「先生、おっしゃるとおりです。・・・」と、主の言葉を正しく理解し、自分の表現として返します。しかし、その彼に主イエスが言われたのは、「あなたは神の国から遠くない」でした。なぜ主の言葉を正しく受け止めている彼に「神の国はあなたのものだ」ではなく、「遠くはないが、神の国には至っていない」と言われたのでしょう。それは彼が、言葉の意味は理解しているが「実践を伴っていない」ことを指摘されてのものだったのです。明快である上に威厳と権威に満ちた主イエスの言葉に、もはや問う者は誰もいなかったと、この箇所は結ばれています（同１２：３４）。

この律法学者との問答の中で、主イエスは、かつてモーセが十戒を布告したと同じように、「神と人との愛と信頼の関係が再確認され、神と人との交わりと、人と隣人の交わりが、アガペーの上に新しく始まる」ことを布告されたのです。しかし、神と人との交わりは人間の罪によって破壊されていて、その再構築には大きな修復工事を必要とする・・・。つまり、主イエスはここで既に十字架に於いて人間の罪を贖うことを決心しておられたと思われます。今日読んだ聖書の人々の表現には、このことはキリストの十字架と復活、いやむしろ一人一人の上に聖霊が降るまで、人々は静まって待つしかなかったことを示していると思います。というのは、聖書のこの後のところで主は「御自分がダビデの子以上の者であること」を明らかにされ、人々が固唾を呑んで見守る中、十字架への道へと出発されているからです。

律法学者の問いに答えて律法の中心について断言された主イエス、それは律法の前提となる神と人との愛の回復のために、つまり人を救うために、「神が十字架にかかる」という「神御自身による決意の宣言」でした。主イエスの徹底した愛の姿勢に触れた人々は、主の中に神の権威を感じて沈黙し、歩み行かれる主を見送るばかりでした。ここに、主の十字架へと続く一筋の道が見えて来るのです。

（説教要約　羽入田悦子）